

# 郷土かみのかわの歴史・文化財

## 町指定文化財 高竈神社アカガシ

東汗の満願寺に隣接して高竈神社という神社があります。持統天皇（686～690）の時代に、河内郡にあつた10の郷のうちの1つである丈部（はせつかべ）郷の氏神として創立されたともいわれる神社です。その境内に樹齢200年を超える一本のアカガシの老木があります。これが町指定文化財高竈神社のアカガシです。

アカガシというよりドングリの実がなる木といったほうが、お分かりになる方も多いかと思います。アカガシはブナ科の常緑高木で、宮城県から新潟県より南の本州・四国・九州地方・朝鮮半島南部・台湾の比較的暖かい場所に生息しますが、カシの仲間では最も寒さに強い木です。木がまだ若い頃は、表面は滑らかなのですが、老木になると樹皮がうろこ状になります。高竈神社のアカガシも200年を超える老木であることから樹

皮がうろこ状になっていることがわかります。葉が真緑で厚く、表面が光っていることが、「照葉樹林」という言葉の由来になっているといわれています。

アカガシは日本で産出される木材の中では、最も硬く強度のあるものの一つといわれており、以前はこの木で作られた木刀を所持するのには、警察への届出が必要であつたことですから、その硬さがわかると思います。それをいかして、車両や機械・船の材料や薪など強度が求められるものに使われています。このアカガシは、歴史的に見ても日本人の生活に密接な関係を持つもので、発掘調査で出土した弥生時代や古墳時代の木製の農耕具の中には、アカガシが使われているものが多く、強度が必要な農具に適したものだといわれています。これより前の縄文時代の人々は、アカガシの

実であるドングリを積極的に食糧として利用しており、主要な食糧の一つであつたと考えられています。

温暖な気候を好むアカガシの木は、栃木県内で自生するものは少なく、お寺や神社にわずかに自生するものや植栽されたものがあるのみです。高竈神社のアカガシは高さが11mを超える立派なものです。が、長生きするものは400年近く生きて、その高さは20m近くになるといいます。地域の皆さんに見守られながらここまで生きてきた高竈神社のアカガシの木を、未来の上三川町民のために残すことが、私たちの義務でもありません。



樹齢200年を超えるアカガシの老木

江戸時代																時代		
1833	1821		1805	1800	1790		1783	1780	1776	1765	1764	1750	1741	1728	1727	1712	1703	西暦
天保4	文政4		文化2	寛政12	寛政2		天明3	安永9	安永5	明和2	明和元	寛延3	寛保元	享保13	享保12	正徳2	元禄16	元号
大凶作による米価高騰で豪商農への打ちこわしが続発する。																で き こ と		
田村仁左衛門、この年と、天保7年の大凶作に際し、薄播きが好結果を生み出し、冷害に強い農法であるとの確信を得る。																		
田村吉茂、父吉昌より家督を受け継ぐ。																		
築村と成田村の間に用水に関わる騒動がおきる。																		
幕府、関東取締出役を新設。																		
徳川家光150回忌法会。																		
田村仁左衛門吉茂が生まれる。																		
下野国南部一帯にて打ちこわしが起きる。																		
浅間山大噴火による凶作が起きる。																		
日光社参。関宿通多功道も通行。																		
徳川家康150回忌法会が行われる。																		
宇都宮城下において豪商打ちこわし。																		
徳川家光の100回忌にあたり、日光道中において大規模な通行がある。																		
大山村領主小出頼負の領民11名が、江戸赤坂御門の小出屋敷にて検見の不正を訴え出る。																		
13の大名が通行。																		
8代将軍吉宗、日光社参。関宿通多功道にも旧家臣34名がお目見えする。																		
壬生にて、多功城主子孫多功孫左衛門と鳥居忠英が近江水口城から壬生城に移封される。（下野における干瓢伝来）																		
多功・築・石橋村と大山村との間で起きた入会地をめぐる争いに対し幕府が裁決をだす。																		